

新年度より総合科学部が変わります

大学院には総合科学教育部を設置

総合科学部将来構想委員会
総合科学部副部長
中嶋 信 なかじま まこと



学生が真の教養と実践力、さらにはそれらの基礎となる人間力を身につけるために、大学での教育が変わりつつあります。今号の特集や記事で紹介されている高大連携教育懇談会や高校からの要請による出張講義、前号で紹介した学生自身が授業内容を提案するプロジェクトチームなど、多角的な模索がなされる中で、総合科学部では今までの人文・社会・自然系等に分かれていた分野を統合・融合して見直すことになりました。

具体的には人間社会学科・自然システム学科の2学科10コースが、人間文化学科・社会創生学科・総

合理数学科の3学科7コースに改組されます。このためですものは、1.専門性に確信を持たせる、目的を明確にした教育
2.明快な自己表現ができるように、人間力を高める教育
3.生き方に自信を持たせる、幅広い視野に立った教育

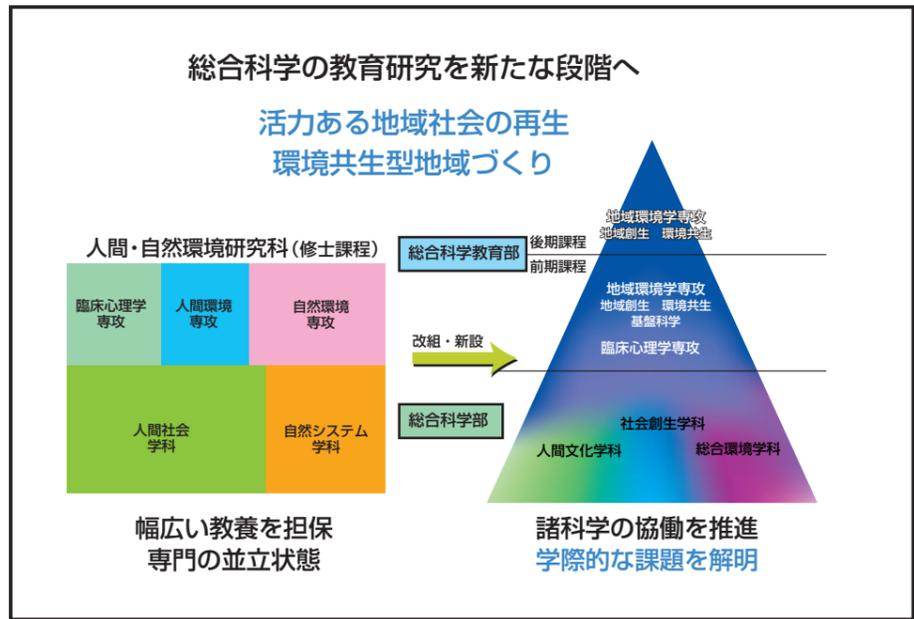
ということ、学生一人一人の個性や力を引き出すための教育が明確にされています。

特に人間力に関して中嶋先生は、「授業を受け身で聞くだけでなく、対話や発表の場を多くして、自分で考え自分で解決方法を見いだしていける、能動的な力を養えるような授業にしたい」と同時に、大学の先生が研究者だけでなく教育者としての力も持つ、教育が前に出る時代になってきたことを強調。

「例えば環境問題一つとってもそこには、科学・技術・経済・政治などあらゆる分野が絡んできます。地

域づくりを考えたも、自然科学や人間学・地理・歴史・行政と広い角度から見なければなりません。まさに総合科学的な視野がなければ全体を捉えることはできません。ですから大学教員の仕事も、教育の中身も変わっていくのが当然のことでしょう」

また大学院(博士前後期課程)にも総合科学教育部を設置して、地域科学の専門分野を中心に幅広いバランスのとれた実践力が身に



つくようにしていきます。総合的な視野と深い専門性をあわせて身につけた人材を社会に送り出すとする、徳大の教育改革に大きな期待が寄せられています。

「授業」より「番組」をプロデュースする



総合科学部人間社会学科
高橋 晋 たかはし しんいち

「昨年度の『共通教育賞』を受賞された高橋先生は、『授業』という番組をプロデュースするという考え方に基づき、パソコンを最大限に駆使した授業を展開しています。最初から最後まで、パワーポイントで制作したスクリーンを見せながらビジュアルな授業を進めています。

学生の授業への興味、理解度、集中力を高めるため、動画や音楽を適宜挿入したり、ワンポイントとして流行のキャラクターのカットを入れるなどの工夫がされています。もちろん方通行にならないために、途中でクイズを出したり、ポイントを筆記させる(後で授業のミニレポートを提出)など、授業を受

教員と受講生が共に創る場と考えています。

神奈川県横浜生まれ。慶應義塾大学大学院を修了し、弘前大学を経て、1995年に徳大に赴任して14年。この授業スタイルが最初からできていたわけではありませぬ。自身の学生時代の授業も振り返りながら、

「『良い授業』について試行錯誤してきました。パソコンも最初は一部だけ使っていました。しかし『文化』というナマモノを扱う私の授業は、映像を見せないとイメージがわきにくい。そこで視聴覚資料をフルに使う文化の仮想体験をしてもらう方法をとっています。」

という先生の専門は、異文化・自己化の意味について考える『文化人類学』。

後期の授業は『沖縄社会文化論(歴史と文化)』。私たちに近づくべく遠く沖縄は、中国や台湾、朝鮮半島など東アジアと交流しながらも、日本の一部としても影響を受

けた独自の文化を持っています。また複雑な歴史もあります。まさに目で見て耳で聞かなければ理解しにくい内容がたくさんあります。沖縄の方言や音楽を現地の映像で見せたり、時には授業の中で先生自ら三線(さんしん)沖繩の三味線を演奏することも。学生たちはスクリーンに映し出された映像と先生の巧みな会話に引き込まれていきます。授業を休む生徒もほとんどいないそうです。

全ての授業内容がすでにパソコンに入っていますが、全く同じものを使い回しすることはあまりありません。常に新しい話題、資料を探して取り込み、改良を加えては制作をやり直すといった作業も。

「ネタ探しも結構楽しみながらやっています。受講生の立場に立って、難しい概念もできるだけ具体的に、わかりやすく説明できるように改良しています。同じ内容でも、伝え方で学生

受講生のコメント
まるでドキュメンタリー番組を見ているようで、おもしろくて最後まで飽きないですね。次は何が出るんだろうと楽しみです。



の興味、理解度は大きく変わる。今後はもっと学生が参加できるように授業を工夫したり、ゲストを呼んでライブ感のある授業にしていきたいですね」と、授業プロデューサーの構想は広がっています。

特集「徳島大学の学生パワー」を読んで



- たまには学生達の姿を全面に出した企画が欲しかったので、良かったです。ただ、学生達の姿のほとんどが記念写真みたいだったので残念でした。
- 学内・外の話題を多岐にわたり、興味深く読めた。地域医療研究会の話題は、ぜひ一度話を聞いてみたいと思った。

- 学生が主体的に大学の改革やキャンパスを快適にするためにグループで取り組んでいることに感銘を受けました。
- 敢えていえば、とくにロボコンは学生の主動によるところが大きいように思ったので取材だけでなく、学生の寄稿も取り入れた方が良かったのではないのでしょうか。

とくtalkへのご意見

■文科省のゆとり教育や新医臨床研修制度による学生の学業や知的レベルあるいは学生の卒後の動向などにおける影響力最近の傾向およびこれに対する大学の取り組み等紹介していただきたい。

→本号の特集では、高大連携および初年次教育の観点から、ゆとり教育の影響についての検討と対策に関する取り組み例を紹介しています。この他にも徳島大学ではファカルティ・ディベロップメント(FD)活動を推進し、各学部・学科の専門分野に対応した様々な教育改善の取り組みを行っています。これらの活動の紹介も今後検討していきます。